

第228回 「元気に百歳」クラブ・俳句サロン「道草」の句会開催

2024年を迎えました。引き続きイスラエルのガザ地区襲撃、ロシアのウクライナ攻撃と、世界は不穏な環境から逃れ得ずにあり、民主主義のもと、平和を尊重して一步一步堅実な暮らしをしていこうと望んでいるのですが、何と云うことか！元日の夕刻、突然の能登半島地震に遭遇しました。この一年、しっかり生きていかなければと、臍を固めた次第です。

さて新年初の「道草」句会ですが、皆さんの決意も新たに、今月もメンバー全員18名が3句ずつ、合計54句の投句が揃いました。そして対面句会は1月12日（金）に、君塚さんは不意の衝突に遭遇され、転倒の負傷、柴楽さんが突然の風邪で休まれ、下述の通りの集まりで実施されました。明峰さん、柴楽さん、お大事になさって下さい。

○ 今月の兼題

当季雑詠（新年を含む冬の句三句）

○ 投句参加者（18名）

芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、金田月草さん、君塚明峰さん、木村栄女さん、坂上まさあきさん、高瀬荻女さん、辻 柴楽さん、手嶋錦流さん、中島懂岳さん、原 晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾白然。

○ 対面句会参加者（7名）

創風さん、和感さん、荻女さん、晶如さん、傘吉さん、多佳さん、白然。

○ 皆さんの披露された優秀句（人気投票句）

今月の天賞獲得2票と最多得票（☆印）4票とバランスが取れ、比較的多くの票数を獲得した方はありましたが、突出して投票を獲得した方がいらっしゃいませんでしたので、それだけ皆さんの句が伯仲していたということでしょうか。多佳さんの句「音高く茶碗の割れし雪の夜」は、天賞2票、合計得票数4票でしたが、天賞数1位が奏功し一番になりました。荻女さんの句「日めくりの位置定まりて年新た」が天賞1票、合計得票数6票でしたが、次位に。ご参考までですが、荻女さんへは「日めくりの位置定まりぬ年新」を提唱させていただきました。また栄女さんの句「少年の靴新しき初詣」は、合計得票数が5票（3位）でした。

得票第4位の4票獲得者は、多数いらっしゃって、多佳さんは投句された3句とも（これは投句した全句です）優良句に高投票を獲得しました。拍手喝采です!!。多佳さんの残りの2句は「師に一句葉書に添へて明けの春」と「こんなにも生きて七草粥する）」です。そのほか4票獲得者は、清助さんの句「切れ風の山遥かへと旅立ちぬ」と、白然の句「初雀何か話してゆかないか」でした。

◎『音高く茶碗の割れし雪の夜』	多佳	天2☆4
◎『子の声も混じりて道ゆく火の用心』	月草	天2㊦3
◎『百舌鳥よ啼け地震の土地なる修羅想へ』	まさあき	天2㊦3
◎『ちようろぎが好物といふ媚迎へ』	荻女	天2㊦3
◎『日めくりの位置定まりて年新』	荻女	天1☆6
◎『切れ風の山遥へと旅立ちぬ』	清助	天1☆4
◎『噫無情令和六年年始』	傘吉	天1㊦3
◎『節料理パズル思わす二段重』	栄女	天1㊦2
◎『寒椿あふれるほどに咲きにけり』	歌多音	天1㊦1
◎『見開きに「感謝」と記し吉書とす』	白然	天1㊦1
◎『初湯浴び四股を伸ばして夢心地』	柴楽	天1㊦1
◎『温き穴夢を見るかや熊眠る』	懂岳	天1㊦1

◎『少年の靴新しき初詣』	栄女	☆5
◎『師に一句葉書に添へて明の春』	多佳	☆4
◎『こんなにも生きて七草粥する』	多佳	☆4
◎『初雀なにか話してゆかないか』	白然	☆4

今月の投句中、討議された句とその内容について申し上げた点をご披露致します。トップバッターは、月草さんの句「子の声も混じりて道ゆく火の用心」に務めていただきます。この句の季語は、「火の用心」で冬の季語です。「昭和」が思い出される懐かしい町内会の行事を句にしたものではないでしょうか。ですが、やや字余りの多い句ではあると思います。中七の「混じりて道ゆく」にも接続助詞「て」が入り、これも字余りになっています。この句の場合「て」を削除し、中七を「混じり道ゆく」にするか、さもなくば「子の声も混じりソプラノ火の用心」では如何でしょうか。

次にまさあきさんの句「百舌鳥（もず）よ啼（な）け地震（なみ）の土地（くに）なる修羅想へ」が、天賞2票を獲得されています。住田先生がご健在の頃は、漢字に対する当て字のカナふりは、注意されていました。「娘」は「こ」でなく「むすめ」です。「女」は「ひと」でなく「おんな」です。今回の場合は、土地（とち）に「くに」と、当て字の「かな」をふられています。この句の場合、中七に「地震（なみ）」と表現されていて、土地を「くに」と、発音するのがリズムは良いですね。そこでご提案です。「くに」は「邦（くに）」を当てるのはいかがでしょうか。「百舌鳥よ啼け地震（なみ）の邦（くに）なる修羅想へ」となります。如何でしょうか。

次に荻女さんの句「日めくりの位置定まりて年新た」が、今回の句会の場合は最高の人氣を集めました。句の季語は「日めくり」ではなく「年新た」が冬の季語でしょう。年に一度、自分の見やすいところに日めくりのカレンダーを置かれ、日ごとの便宜を図って居られるのだと思います。ご自身の決意の披露だったとも言えるのではないのでしょうか。何気なくなさった決意でも、周囲には何かの決心のようにも思われます。気持ちが好いでしょうね。ただこの句にも「接続助詞「て」が使われており、此处も俳句の所謂スマートさ、二句一章にして「日めくりの位置定まりぬ年新」と、下五の末尾についている「た」を省略するのが、句のスマートさと教わりました。如何でしょうか。

次に清助さんの句「切れ風の山遥へと旅立ちぬ」が、高得票をいただきました。句意は切れた風が遙か山の向こうに飛んで行ったという句ですが、この漢字「風」は、日本で構成された字であると聞きました。季語は「春」、「新春」ですね。ただ詠み人がこの切れ風の飛んでいく「遙か」を、どのように想定されているかで、意味も違ってくるように思います。そして、この句も格助詞「と」の働き方の良否でしょうか。句を「切れ風の山の遙かへ旅立ちぬ」と詠めば、作者の目が時間をかけて飛んでいく切れ風を追いかけているように思われます。「切れ風よ、何処へ行ってしまうのやら」が、読者には残ります。白然にはこの句はとてもファンタジック、ロマンチックに感じられますが、如何なものでしょう。

句会は回を重ねるごとに、ディスカッションが活発になり、熱気を帯びてきたように思います。会議初回に何を討議しなければならないか、課題もぼんやりとですが、あるような気がしてきました。じっくりと検討を加えつつ、充実した勉強会にしていきたいものです。まずは句の中での動詞の働きです。「動詞は俳句一句に一つだけ使えば好い」という言葉があります。とはいえ、動詞の活用も考慮してうまく使いたいものです。まずは文語体文法上で如何なる活用をするか、調べていくことにします。ではまた。

白然記